防災研究所とともに*

石　原　藤次郎

(1)

わが防災研究所は3部門をもって昭和26年4月1日発足，今日まで20年余を経過して，16部門18教授と11の付属研究施設を有する大研究所となりました。まことにおめでたい限りでありますが，その間文部省・大学当局をはじめ関係各方面から賜わりました格別の御援助に対し，心から感謝の意を表しますとともに，多数の所員が職務に精励し，次々と立派な成果をあげてこられたことを高く評価しなければならないと思います。私自身は研究所の創設間もない26年4月21日付で併任教授となり，途中2回所長として4年間重責をけがし，明年3月末をもって定年退官することになっていますので，実に21年近くもこの研究所と深い関係をもつわけであります。しかも私だけは，どういうわけか，1年ごとに併任を更新するのでなく，ずっと初めから続けて併任ということになっていまして，まことに因縁の浅からざるものを感じています。皆様とともに，青年時代から今日まで，防災関係の研究と教育にうちこむことができましたことを，この上なくうれしく，光栄に存じている次第であります。その間を顧みて，若干の所感を述べさせていただきたいと思います。

(2)

私事にわたって恐縮ですが，私は京都市の南郊吉祥院で，明治41年8月26日に生れました。その丁度1年前，わが吉祥院は桂川の大氾濫のために潰滅的な災害を受けたのでありますが，私は両親や親類縁者からこの大災害の悲惨さを絶えず教えられて大きくなりました。雨が降ると，下駄を縄でつないで流れないようにするのが小供の仕事でありましたし，雨がきついと，家から靴をぬいでぶらさげながら中学に通ったことを覚えています。少なくも大正の終り頃までは，今日でいう内水災害に悩まされたわけであります。こうしたことが若き日の私の多感な心をとらえたのでしょうか。三高を経て京都大学工学部土木工学科に入学し，昭和5年卒業と同時に講師となり，翌年助教授となって水理学・河海工学を専攻しました。昭和18年教授となり，26年以後は防災研究所併任として，河川災害・水文学の研究にたずさわってきました。その間学問的にはみるべき業績もなく，申訳ない次第でありますが，若いときから今日まで，40余年にわたり水害と河川の研究と教育に没頭し，いわば初心を貫いてまいりましたことは，非常な幸せであったと心から喜んでいます。

(3)

戦争中から戦後にかけて，国土はたえず大水害に見舞われ，荒廃そのものでありました。国敗れて山河ありといいますが，その山河はあまりにもいたましいものでありました。敗戦によってなすこともなく茫然としていました私どもを大きくとらえましたのは，昭和21年初頭，京都大学に災害の予防と軽減に関する総合研究班が組織されたことであります。佐々・棚橋の両先生，そして今は亡き西村先生とともに，秋色濃い大原の松茸山で防災の総合研究について話しあったことを覚えています。研究所設立の理念といった問題をめぐって，研究の総合協力，人事の交流，セクト主義の解消などが話しあわれ，22年に財団法人防災研究所（今日の防災研究協会）が設立されました。

お互いに40才前後の若さで，意気軒昂たるものがあり，国土の復興と発展を目指して真面目な努力を重ねましたので，次々と注目すべき成果があがってきたようであります。たまたま昭和25年のジェーン台風による大阪の惨々たる被害を契機として，防災科学を組織的総合的に研究する専門機関の設立の必要が痛感せられ，法律84号をもって26年4月1日に京都大学に付置せられたのが今日の防災研究所であります。その間における関係者のなみなみならぬ努力はいうまでもありませんが，建設省の絶大な側面的援助をはじめ，いろ

---

* 防災研究所創立20周年記念講演（1971年11月27日）

いろ興味ある思い出も少なくありません。こうしたことは，折をみて別の機会にお話することもあろうかと思いますので，本日は割愛させていただくことにします。

(4)

いずれにしても，私どもが当初から心がけましたことは，学部と研究所とが一体となり，適宜人事の交流を行ない，研究題目選択の柔軟性をうたってきたことであります。創立当時の潑剌たる意気ごみをいつまでも維持し，たえず若々しさをもちつづけることが，何よりも大切だと思います。こうした点について，いままで関係者の精進と努力にみるべきものがありますが，これからは次第に研究者の顔ぶれや取りあげる題目が固定化されるのでないかと心配されます。このことは，研究所のあり方に関する重大な基本的問題でありますが，理学・工学・農学など各分野の研究者による組織的総合的研究を目的とする防災研究所において，その感を深くせざるを得ません。

防災研究所では年々新部門の計画を立てて，予算を要求していますが，諸般の事情からなかなかうまく運ばないようであります。文部省科学研究費において，明年度から自然災害科学が特別研究となり，研究費がかなり継続的に確保され，また防災科学資料センターの設立が具体化しそうでありますことは，大きい喜びといわねばなりませんが，新部門の創設には，少なくとも10年間着実に学問的業績をつんで，学界が高く評価するところとならねばならないでしょう。学問の進歩とともに，次々と新たな境界領域が要請されますが，われわれはその方面に一段と努力を重ねるべきだと思います。防災研究所では，一応自然災害の分野を対象としてきましたが，果してこれからもこのままでよいのでしょうか。かつて私の所長時代に，長期計画として52部門案を申し出て，関係者を驚かしたことがあります。その中には，災害の人文社会学的なアプローチや，今日大問題となっています公害対策の諸分野を含んでいました。われわれの防災研究所という名称そのものは，将来の幅広い発展を見越して，かなり広い分野を対象とできるように考えたつもりであります。こうした点について，今後さらに検討を重ねられて，この研究所がいつまでも若さと活力をもちつづけ，発展されることを祈ってやみません。

(5)

いま一つ申上げねばならないことは，研究所の建物が他の四つの研究所と一体となって，立派にできあがったことであります。私自身は宇治地区整備委員会の委員長として，終始この計画に関与して参りました。速水先生が所長のときに，非常な英断をもって防災研究所の宇治統合の方針が決定し，そのあとを私が受けて，他の研究所とともに話しあいを続けてきたのでありますが，心からのお互いの信頼のもとに，円満にしかも着実に整備計画が具体化してきたわけであります。こうした5研究所が一つの大建物にまとまって統合されましたことは，喜ばしい限りであります。多くの独立した研究所の見事な協力は稀有のことであり，今後の大学のあり方として示唆するところが少なくないようであります。それにしても，関係者の虚心坦懐のもとに，宇治地区が見事に整備されてきましたことは，まことに喜ばしく，さらに周囲の環境を一段と整えられて，落ちついて勉強にうちこめる静かなキャンパスを完成していただきたく，京都大学の学問的発展は宇治からといった日が来ることを待望しています。しかしながら，ときに私の脳裡をかすめる一抹の不安があります。乏しい環境のなかにおいてこそ，輝かしい広大な未来を考えて，生命が躍動するともいいます。満ちたるは欠けるの始まりともいいますが，立派な建物におさまったわが防災研究所が，さらに多くの俊秀を擁して一段と躍進をせられ，私の懸念が杞憂に終ることを念願してやみません。

(6)

防災研究所とともに，20年余の歩みを続けました私です。今日20周年の記念式を迎えまして，感慨一人のものでございますが，一言所感を述べまして御挨拶といたします。御静聴を感謝するとともに，改めてわが防災研究所の一層の発展を祈ります。